

Living Locally

Reconsidering Critical Regionalism

アトリエ・ワン+福祉楽団

乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室

Eureka

木暮伸也

木村崇人

小林エリカ

ツバメアーキテクト

照屋勇賢

藤野高志／生物建築舎

藤本壮介

水谷俊博建築設計事務所

三田村光土里

山極満博

ライゾマティクス リサーチ

地域社会へのまなざし

ここに棲む

地域社会へのまなざし

ここに 棲む

Living Locally
Reconsidering Critical Regionalism

アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

彰国社

ごあいさつ

私たちが暮らす街や家は、社会の変化を反映しながら時代ごとに姿を変えています。現代の日本は、物質的／経済的豊かさとは異なる価値観を人々が大切に考えはじめ、地域社会を見直す転換期を迎えています。自然との共生、脱成長型経済、高齢化の進展や家族のあり方の変容が目の前の差し迫った問題として、個人の生き方に大きな影響を与えていると言えるでしょう。

建築デザインの領域においては、コミュニティとの関わりや協働が重視され、理念や美意識を中心に据えた建築デザインとは異なる傾向が求められはじめています。また、アートの領域では地域性や個人の違いの多様性を肯定していく表現が目され、もっとも個人的と言える記憶や身体感覚、そして境界によって隔てられたもの同士の関係をつくり上げることに大きな関心が寄せられています。

本書でご紹介するのは、地域社会に棲むことへ目を向ける14組の建築家やアーティストの実践です。それらを通して、私たちがこれからどう棲むべきなのかを考えるうえで大切なメッセージを受け取っていただければ幸いです。

なお、本書はアーツ前橋における「ここに棲むー地域社会へのまなざし」展に際して刊行されました。同展の開催にご協力をいただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。

2015年10月
アーツ前橋館長
住友文彦

Greeting

The houses and towns that we live in reflect social change just as they themselves are subject to change with each successive era. In Japan today, people have begun to place greater importance on values other than material and economic wealth, ushering in a traditional phase marked by a reevaluation of regional society. Imminent problems such as coexisting with nature, the degrowth economy, the graying of society, and changes in the family structure are also exerting an influence of individual lifestyles.

In the field of architectural design, there is a strong emphasis on connecting and cooperating with the community, and there is also an emerging desire for approaches that differ from traditional design strategies rooted in ideas and aesthetics. In the field of art too, work that affirms local characteristics and a diversity range of individuals is attracting attention, and there is also a great deal of interest in exceedingly personal areas such as memory and physical sensations, and creating links between those who are separated by various boundaries.

In this book, we introduce the practices of 14 groups of architects and artists who focus on living in regional society. It is our hope that through their work readers will discover important messages related to how we might live in the future.

The book is being published in conjunction with an exhibition titled *Living Locally: Reconsidering Critical Regionalism*. We would like to express our heartfelt gratitude to all of the countless people who helped us realize this exhibition.

SUMITOMO Fumihiko
Director, Arts Maebashi
October 2015

Living Locally: Reconsidering Critical Regionalism

First Published in Japan on October 30, 2015
by Shokokusha Publishing Co., Ltd.
8-21 Tomihisa-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0067 Japan
Tel +81 3 3359 3231
http://www.shokokusha.co.jp

Supervising: ARTS MAEBASHI
Publisher: Masanori Shimoide
Printing and Binding: Shinano Publishing Press Co., Ltd.

© ARTS MAEBASHI 2015
ISBN 978-4-395-32051-6 C3070

Any unauthorized duplication (copying),
reproduction, or recording to magnetic, optical,
or other media of the content of this book, whether in whole
or in part, is strictly prohibited.
Please contact the publisher for authorization.

目次
凡例
1 序文
2 ごあいさつ
3 序文

凡例

- ・本書はアーツ前橋で開催された展覧会「ここに棲むー地域社会へのまなざし」の図録として刊行した。
- ・出展者名の五十音順に掲載した。
- ・作品図版に添えたデータは下記のとおりとした。
建築作品: 作品タイトル、竣工年、所在地
美術作品: 作品タイトル、制作年、展覧会、開催年、開催都市／国、技法・材質、寸法（縦×横×奥行き、映像の場合は尺）、協力者の順に記した。
ただし、作品によって記載していない項目もある。
- ・作品名は〈 〉、プロジェクト名は〈 〉、シリーズ名及び展覧会名は「 」とした。

Contents

目次
2 ごあいさつ
Greeting

6 ここに棲むための想像力
住友文彦
Imagination for Inhabitation
SUMITOMO Fumihiko

16 ケンチク(Kenchiku)と
批判的地域主義(Critical Regionalism)に関する覚書
渡辺真理
Notes on *Kenchiku* and Critical Regionalism
WATANABE Shin Makoto

28 アトリエ・ワン+福祉楽団
Atelier Bow-Wow+Fukushi Gakudan

34 乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室
INUI Kumiko+Tokyo University of the Arts Inui Lab

40 Eureka

46 木暮伸也
KIGURE Shinya

52 木村崇人
KIMURA Takahito

58 小林エリカ
KOBAYASHI Erika

64 ツバメアーキテクツ
Tsubame Architects

70 照屋勇賢
TERUYA Yuken

76 藤野高志／生物建築舎
FUJINO Takashi/Ikimono Architects

82 藤本壮介
Sou Fujimoto

88 水谷俊博建築設計事務所
Toshihiro Mizutani Architects

94 三田村光土里
MITAMURA Midori

100 山極満博
YAMAGIWA Mitsuhiro

106 ライゾマティクス リサーチ
Rhizomatiks Research

112 座談会 ここに棲む根拠はどこにある？
ツバメアーキテクツ×三田村光土里×藤原徹平

120 「ここに棲む」ためのブックガイド
渡辺真理・藤原徹平・住友文彦

122 作家略歴
Artist Profiles

132 展覧会概要
Exhibit Information

133 謝辞
Acknowledgements

134 写真クレジット
Photo Credits

ここに棲むための想像力

住友文彦

「『現代の建築』」の巻頭語「現代の建築」のなかで、文彦は「現代の建築」とは、

もし、ビルに囲まれた大都市の中心地ではない場所にあなたが住んでいれば、自分が住んでいる場所には、かつて誰が住んでいたのか、あるいはどのような自然や地形があったのか、ときっと考えたことがあるだろう。自分がどのような住まい方をしているのかについて考えるとき、家族や仕事という身近な事情が必然的な要因になっていると感じている人はおそらく多い。

しかし、そこにもっと大きな偶発性が潜在していると想像してみてもいいはずである。それは私たちの生の営みを、自然との関係や死者の記憶など循環的な時間の流れと分かちがたく結びついているとみなすことになる。こうしたことを想像する力が、近代国家や科学／教育のシステム、そして資本主義経済における労働によって現代の日常生活からは少しずつ除外されつつあると言えないだろうか。

日本の自然観や死生観を来訪者の視点から丁寧に見つめた小説のひとつに、アメリカのノーベル文学賞作家パール・S.バックの『つなみ』（1947年）という小さな美しい作品がある。彼女は、日本の海辺に住んだことがあり、その経験から津波で家族を失った少年の物語を書いている。その最後の場面で、少年が悲しみや恐怖を克服した証として新しい家に海側を向いた窓を作った、と書かれている箇所を、かつて私は合理主義として批判したことがある¹。その漁村の家にはどこにも海を向いている窓がなかったが、新しい窓は成長した少年が自然を統治する知恵と勇気を持つ人間の象徴のように登場し、自然への畏怖が薄まっているように感じたからだ。おそらく長年かけて自然と共存して生きてきた人々には、その両方を分かちがたく受け止める感性が根付いているはずである。

「『現代の建築』」の巻頭語「現代の建築」のなかで、文彦は「現代の建築」とは、

震災と建築／芸術

「『現代の建築』」の巻頭語「現代の建築」のなかで、文彦は「現代の建築」とは、

関係が見出せる。現在の私たちが、どのように住むべきかを考えるうえで自然災害、とりわけ近年のふたつの大震災の影響を抜きに語ることはもはやできない。2011年3月11日、アーツ前橋の実施設計のために現地調査を行っている最中に私は経験のない大きな揺れに襲われた。その後、新しい美術館を準備する年月は電力制限や福島第一原発の事故を経験することや、芸術は社会においてどのような役割を担うのかを問い続ける時間と重なっていた。そのため、この美術館がかつて商業施設だったときの建物のかたちを留めることは、訪れる人に過去と現在をつなぐ時間の連続性を感じ取ってもらえるという点で、とても大きな意味を持っている。設計者の水谷俊博（88頁）は、地域の人々が見慣れた外観を大きく変えることなく、むしろ外側に広がる街の空間と類似する知覚経験を内部に持ち込むというコンセプトによって建物を生まれ変わらせた。さらに、私たちが発見したのは、ほとんど人の目に留まることがない北側の大きな非常階段だった。その当時、前橋で滞在制作を行っていた照屋勇賢（70頁）は、ひとりの芸術家としてできることがあるのかを自問する日々を送っていた。そのなかで、この非常階段をガラス越しにいつも見えるようにして日常と非常時を連続させ、さらに彼が震災後の3月27日に聴いた群馬交響楽団のチャリティコンサートの音源が毎日午後2時と4時に再生される空間をつくる提案をした。それは、「非常時の芸術／美術館の非常時の役割」を言葉と絵によって表現した冊子を伴って、開館時に美術館の展示室の一部となり実現した。

多くの家屋や建物、そして街までを破壊した震災は、それらを作る仕事に携わる建築家たちにも大きな問いを突き付けたであろう。私たちが生きる空間がどのようなものであるべきか、そこには技術と感性の双方がせめぎ合う。偶然にもここ前橋には、20世紀初頭に建築は芸術であるかをめぐって論争を繰り広げた野田俊彦と中村鎮のふたりが設計した建物が現存している²。そして、その論争の直後、1923年に起きた関東大

震災に先立つ1920年に「分離派建築会」が開催され、そこでも若き建築家たちによって建築は芸術であると強い主張がなされている。なぜ、そのようなことが必要だったのか。彼らが学んでいた東京帝国大学建築学科の教授だった佐野利器が1915年に地震の揺れを定量的に測定し耐震構造学の重要性を示し、住宅や都市計画において技術主導の解決が注目を集めていたことに彼らは反発したのだった。そして、マグニチュード7.9の揺れによる家屋の崩壊と火事によって東京は荒野になった。生き残った人々がそこで住まいや商売のために建てた一時的な構造物を、低価格で装飾する仕事を請け負うバラック装飾社の活動に着手していた今和次郎は、前年に「日本の民家」という研究をまとめた早稲田大学建築科の助教授だった。それに対して、先の分離派建築会の滝沢真弓は批判を突き付ける。建築を芸術とみなすうえで装飾を剥ぎ取るべきであるとし、そして主体としての建築家の役割を強く求めた。倉数茂は、国家や宗教など父権的な求心性に依拠した安定した象徴秩序と切り離され、都市部を中心に大衆が個人の自由な欲望を表出させはじめる時代——それは現代まで続く近代以降の社会に共通するものである——に、分離派が主観による自由な表現を求めた理由を、権力による管理に対して単一の主体を編み上げていく技術が必要とされていたと分析している。そして、さらにそれは「実は匿名の合理性、権力による管理と相補的である」という指摘をしている³。現代の私たちもまた内面と行動を「自分らしさ」という単一性に向けて編み上げるべきと考えているが、それは同時に政治や資本の要求でもあり、そして芸術における個性という考えも類似のものになりえる。つまり、私たちの生が近代の画一化から逃れるには、それを揺るがす感性に棲むことの可能性を見出し、「建築」や「芸術」に対してすでに付与された単一性を拭い去る必要がある。

細部へのまなざし

もう一度、先の論争の応酬を見てみよう。滝沢の指摘に対して、今和次郎は人々の生活のなかで感じているものや欲求しているものを肯定し、バラック装飾社はそれを表面上に表現するものであると反論する。それ以上の、普遍的な美を建築のかたちに求めることなく、あくまでも表層に現れる人々の生活とその変化を追い続ける今の姿勢は「日本の民家」研究や「考現学」研究においても貴かれている。彼の「考現学」は、本格的な消費社会が到来し、街を闊歩する人々の行動や身なりを逐一記録する。その記録を固定的な分類にまとめることなしに、ひたすら記述していく。対象に寄り添い、更新されることで増殖していくような運動だった。おそらく「考現学」の魅力とは、こうして雑多で豊かな細部が排除されず、しかも単一のものに回収されないまま眼にすることができる点にある。

このフィールドワーク的な観察によって、まるで生き物のように変化していく街とそこを行き交う人々を観察する眼は、乾久美子（34頁）が実践している作業にも共通している。ただ乾の視線が見つめるのは、今が路上の個人を観察していたのに対して、あくまでも空間に生じているかたちである。さまざまな人々が集まるときに空間が本来の目的と異なる使われ方をする数々の例を採集し、そこに新しい建築の言語を見出そうとしている。自治体や企業や商店がそれぞれの目的によって形づくる街のかたちに対して、個人が自由に他の人と出会い、対話するような空間的条件を見つけ出すことは、まだ管理や消費の対象となっていない人の感情の働きにかたちを与えるようなものと言えないだろうか。また、同じようにまなざしが届いていない細部を見出すうえで、写真というメディアも有効な手段になり得る。かつて白川昌生の「場所・群馬」という活動にも参加していた木暮伸也（46頁）は、生まれ故郷でもある前橋で田んぼの水面に反射する郊外の住宅を撮影している。また、「parallax」シリーズでは

アトリエ・ワン+福祉楽団

Atelier Bow-Wow + Fukushi Gakudan



福祉楽団は、〈恋する豚研究所〉の周辺にある農家の荒れた林の手入れとして、間伐し、薪にすることを始めた。きれいになった里山に引き寄せられるように、持ち山の整備や、薪の購入依頼がくるようになった。こうした経験から、研究所隣の休耕地に薪割小屋を整備し、障がい者や高齢者が、就労やリハビリなどで多目的に協働利用できる仕組みと空間の実現を「就労移行支援」の枠組みで検討している。

アトリエ・ワンと福祉楽団は2010年から、《恋する豚研究所》《多古新町ハウス》《1K》と3つのプロジェクトを協働で進めてきた。福祉楽団は千葉県香取市を拠点に、地域に密着した福祉を実現するために、人やモノなどの境界を取り払い、まちづくりの資源に変えていく取り組みをしている社会福祉法人である。福祉の対象者を分けしがちなこれまでの制度や施設設計のあり方に対して、だれもがそこに自然にいられるような開放的な空間を模索している。こどもから高齢者まで、障がいの有無にかかわらず、一緒に生活する豊かさと楽しさ、学び合いを実現するための仕組みと空間のデザインである。(アトリエ・ワン)

Atelier Bow-Wow and Fukushi Gakudan collaborated on 3 projects for *Koisuru-Buta Laboratory*, *Takoshinmachi House*, and *1K*. In an effort to implement community-centered welfare, Fukushi Gakudan, a social welfare corporation based in Katori, Chiba, removes the boundaries between people and things and works to change these people and things into resources used for building communities. They are seeking to create open spaces for everyone, rather than institutions and facilities of the past that tend to set boundary to those on welfare. This is a design attempt to realize the framework and spaces which allow us to experience the richness, joy, and mutual learning from the living within the wider membership from people who need assistance and those who don't, both young and old. (Atelier Bow-Wow)

《1K》2014年-、千葉県香取市
1K, 2014-, Katori Chiba

乾久美子+

東京藝術大学乾久美子研究室

INUI Kumiko + Tokyo University of the Arts Inui Lab

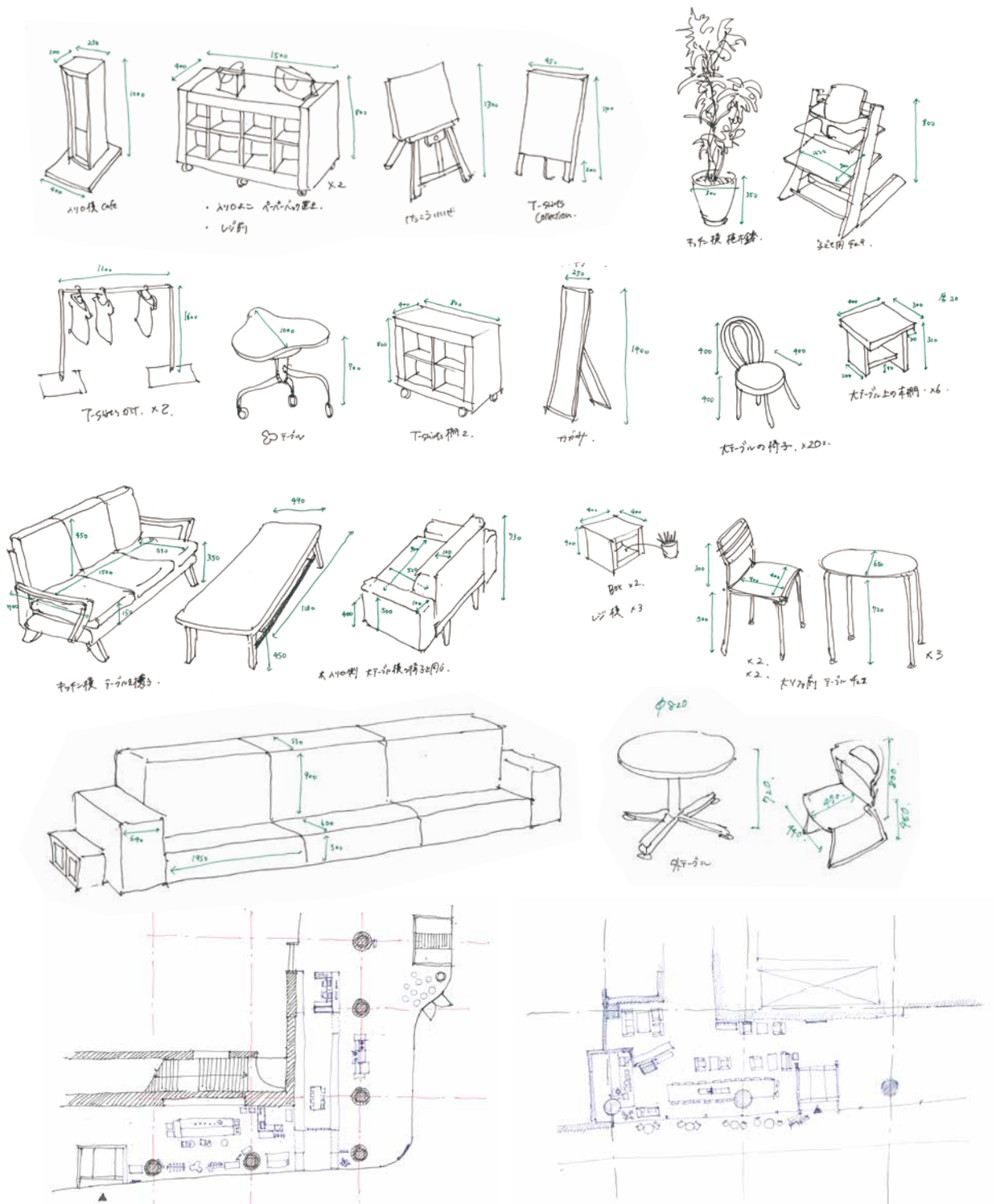
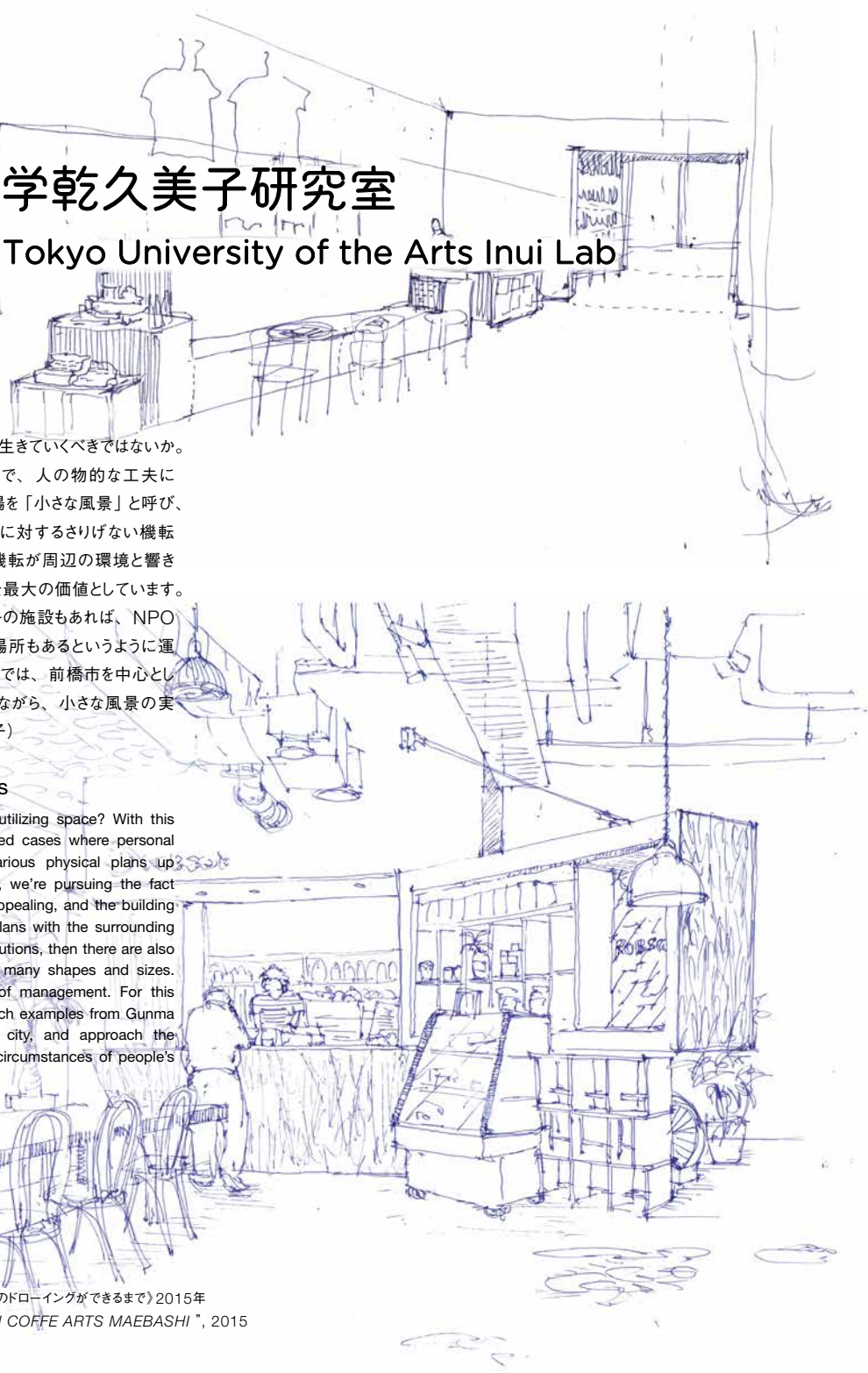
小さな風景のかたち

人はもっと自由に空間を使い倒して生きていくべきではないか。そうした思いから、私たちはこれまで、人の物的な工夫によって居場所が獲得されている現場を「小さな風景」と呼び、調査してきました。生活者の空間に対するさりげない機転が魅力的であること、また、その機転が周辺の環境と響き合うような関係を構築していることを最大の価値としています。事例は大小さまざま。公的セクターの施設もあれば、NPOや民間が運営するちょっとした居場所もあるというように運営形態もバラバラです。本展覧会では、前橋市を中心とした群馬県下で出会ったものも加えながら、小さな風景の実践の様子に迫りました。(乾久美子)

The shapes of little spaces

Should people live by more freely utilizing space? With this thought, we examined and described cases where personal spaces were mastered through various physical plans up until now. As the highest of values, we're pursuing the fact that a person's informal plans are appealing, and the building of relationships that blends those plans with the surrounding environment. If there are public institutions, then there are also small privately managed places, in many shapes and sizes. As such, there are various forms of management. For this exhibition, we want to gather research examples from Gunma Prefecture, centered on Maebashi city, and approach the even more complex and abundant circumstances of people's spaces. (INUI Kumiko)

「ROBSON COFFEE アーツ前橋店」のドローイングができるまで 2015年
The drawing process of "ROBSON COFFEE ARTS MAEBASHI", 2015



1. 野帳に、場所やそこに置かれた家具などを実測図やスケッチにする